
ペルソナ3なんとなく書いてみた

闇のロマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3なんとなく書いてみた

【Nコード】

N0929Z

【作者名】

闇のロマン

【あらすじ】

Fate小説の方でネタとして上げてみて、やっぱ連載してみるかと思いやってみた。

伊織順平性格改変モノです。

ハーレムになるかもしれない。どうなるかはまだわかりません。原作主人公はハム子の方になります。

TSは・・・どうだろうね？未定です。

荒垣さんとかTSしたら姉御キャラだけど可愛いもの好きな可愛い
キャラになりそうだね。
ではよろしく願います。

第一話（前書き）

やっちまっ
たよ
ではどうぞ

第一話

「親父ー、ただいま」

「おお、おかえり順平。今日もバイトお疲れさん。父さんは今日全然来客となくて暇だったぞ！」

俺は伊織順平。

巖戸台の月光館学園という学校に通う高校生だ。

数年前、家族間でちょっとしたいざこざがあった事以外は至って普通の学生だ。

親父は俺の通う月光館学園で警備員の仕事をしているが腕っ節が俺より弱いので少し心配だ。

かく言う俺はタコを焼いてないたこ焼き屋や、ボロニアンモールという場所にあるゲームセンターやカラオケ店などでバイトをしている。

我が家は父子家庭で親父の給料も多いとは言えない。だから二人でボロアパートに住みながら親子協力して生計を立てている。

親父は俺より早く家に戻るので夜はご飯を作って俺を待っていてくれる。

俺は俺のトレードマークと言っても過言ではない帽子を外す。

ちょっと前までは坊主だった髪も今では切りに行く暇がなく、普通にツンツンとハネた短髪になっている。

「はあ・・・いい加減髪切らねえとなあ」

「別にいいじゃないか、中々似合ってるぞ。母さんに良く似て・・・」

ないな別に」

俺は父さんにそう言われ、何気なく手近にあった手鏡を手にする。確かに全然類似する点が見つからない。

俺の母は数年前のいざこざの原因と言える。

もう既に他界しているが。俺も親父も話題に出せるほどで、もう母がいないという事実を受け入れている。亡くなった人は戻ってはない。それならその人の分も精一杯生きる、そう親父と約束したのだから。

「さて、ご飯にするか。順平、皿出しといってくれ」

「おう！」

次の日の朝、俺は少し早めに学校に向かった。

理由は至って単純、忘れない内に担任の鳥海先生に授業の課題を提出しておこうと思ったからだ。

以前の自分だったら課題なんてまともに出そうと思わなかっただろう。きっと提出期限ギリギリにちよつとやってみて結局中途半端に出す、といったところが関の山だったろう。

ただど今は親父と俺の二人で学費を払っているんだ。以前のいざこざがあつた御陰で、と言えるだろう。家族の払ってくれている金を無駄には出来ない、なら出来ないなりに一生懸命やろう。そう思っている。俺は勉強も運動も中途半端にしか出来ないけど、それでも

いい。やらないよりかいいと考えるようになった。そりゃやれたほうが良いとは思っけど、まだまだ時間はあるんだ。

ゆっくり行こうと思う。

「…っと、職員室通り過ぎてたぜ！」

物思いに耽るのに集中しすぎていつの間にか職員室を通り過ぎていた。

俺は改めて職員室に向かおうと職員室の方へ振り返る。

その時、丁度俺より一つ上の先輩、ボクシング部のエースの真田明彦先輩が職員室から出てきた。

先輩は直ぐ俺に気付くと俺の方へ歩いてきた。

「おはよう伊織、今日は来るのが早いな。何か用事でもあったか？」

「おはようございまっす！、出し忘れないように覚えてる内にとっとと課題出しちまおうかと思ひまして！」

俺が学校に早く来ている理由を話すと、真田先輩は「ほう？」と感心したように笑った。

畜生、かつけえなあ…モテる訳だぜ。まあ、あんま色恋沙汰には興味ねえけど。元々モテる様な男でもねえからな。まだまだ俺はガキだし。

「相変わらず頑張っているじゃないか。お前は何をやるにも懸命で俺も見習わなければいけないと思う。…よし、俺はこれから朝練なんだが課題出し終わったらお前も一緒にどうだ？軽くだがな」

「お、マジっすか？じゃあ後で行きますね。あと…出来るだけお手

柔らかかにお願いします！」

「ふっ、やるからには本気だ。悪いな伊織。」

「ウヘエ…真田先輩顔マジじゃないっすか…ま、じゃあ後で！」

俺がそう言つと、先輩も「ああ、後でな」と返してくれた。

俺は一度頭を下げ、職員室へ入った。

「失礼しまーす、鳥海先生おられますか？」

「あら、伊織くんじゃない。どうしたのかしら？」

俺が職員室に入り、鳥海先生がいるか尋ねると鳥海先生本人が返事をしてくれた。

鳥海先生は俺のクラスの担任で、毛先にクセのある短めに茶髪にサバサバとした性格で美人女教師だ。

どちらかという綺麗とか可愛いよりもカッコいいというのが似合うのでないだろうか？

少し…少しだらしのない面もあるがそれもこの人の魅力の一つじゃないかと思う。

「課題を出しに来ました」

「その為にこんな早い時間にわざわざ？感心ねー、先生はこんな真面目な教え子を持って鼻が高いわあ。そうねえ…少し評価上げてあげるわね、伊織くんいつも人一倍頑張ってるしね」

「マジっすか！ありがたいつす！」

「これから頑張ってね」

「うっす！」

課題を出した後、俺は少し先生と世間話…いや、先生のE先生とやらに関する愚痴を聞いてから俺は真田先輩の待つボクシング部へと向かった。

「ただいま参上いたしました先輩！」

「お、待っていたぞ伊織。とりあえず体操着か更衣室のトレーニングウェアに着替えてこい。ウェアは俺の変えのモノしかないがお前の身長ならさほど問題ないだろ」

「了解っす」

俺は真田先輩に言われ、練習場に設置されている更衣室兼ボクシング部室へ着替えに行った。

初めてボクシング部室の男子更衣室に連れて行かれたときはきつと男の住処だし荒れてんだろうなと思っていたが、真田先輩がしっかりしているからか、部員皆がしっかりしているから綺麗に片付いていた。

さすがに汗臭さや男臭さは仕方ないがな。

それとはかく俺は真田先輩のロッカーを開き、中から綺麗なトレ

ーニングウェアを取り出す。

しかしこうしてみると俺の体付きも随分変わったもんだと、着替える間に部室に設置してある姿見を見て思った。

一年位前までは締まりの無かったこの身体も、真田先輩との練習やらなんやらを通して随分と鍛えられた。真田先輩ともそこそこ打ち合えるようになったし、自分の成長を少しでも感じれて、無駄ではないんだと確認させてくれる瞬間だ。

「さて、先輩をあんま待たせちゃ悪いな。行こう」

部室を出た俺は、真田先輩と腕立てや腹筋などのウォーミングアップを済ませた後、月光館学園高等部の校舎周辺を走り込みしていた。さすがに先輩はペースが早く、俺も何度も先輩の練習に付き合っているので少し大変ではあるが付いていける。

「伊織も始めた当初に比べてかなり成長したな。体付きも引き締まってきたし持久力も付いてきてる。いつそ本格的にボクシング部に入部したらどうだ？その方が俺も面白いしな！」

「いやいや、前も断ったじゃないですかー。放課後はバイトがあるんで予定詰まってるんすよ！」

「はは、冗談だ。覚えているさ、今まで通り頑張ってくれよ伊織」

そう話している間にいつの間にか走り込みは終わっていて、その後真田先輩にウェアを明日洗って返すと約束し別れた。

第一話（後書き）

順平は後半かつこよくていいね
前半は少々面倒くさい子だけでも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929z/>

ペルソナ3なんとなく書いてみた

2011年12月3日16時56分発行